

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

12の対話 — 「現代」を問う

テーマ **12** 不死と

月見草？



第12回 不死と月見草？

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 時間になりました。これが第12回、最終回となりました。講座終了後には、部屋を変えて意見交換会を催しますので、そちらにもぜひご参加ください。ではいつものように、ちょうど1年前の3月12日、室井さんがおられたときのプレ講座の記録映像からご覧いただきます。これが最後のシーンですね。その後、吉岡先生にお話しいただこうと思います。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?feature=shared&t=3289>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像
第12回 不死と月見草？

吉岡 最後のテーマである「不死と月見草」は室井さんが、自分が生き残れるかどうかを思いながら、太宰治の「富嶽百景」の中にある「富士には月見草がよく似合う」という言葉をもじって、「不死」という大きな主題の前にか細い月見草を置いてみたらちょっといいかなと考えた、ということでした。それだけしかヒントがないんです。

ともかくお越しいただきありがとうございます。今日はこれまでで最多の参加者だと思います。寒くてちょっと雪もちらついていて変な天気ですけれども、たくさんお集まりいただいてうれしいです。実はさっき、豪華な昼ごはんを食べて身体は元気なんです。二人の人と約束して、この近くでお昼をご一緒しましょうということになって、入ったことのない店だけどネットで近くの洋食屋さんを探して入ったら、これが本格的なフレンチのコースだったんですね。おいしいし、皿数も多い。仕事前でワインが飲めないのが残念でしたが、たったの3,000円なんです。あのクオリティで、パリだったら三倍、ニューヨークだったら五倍はすると思います。こんなに安かったら、そりゃあ外国人観光客は日本に来るだろうなと思いました。

たしかに消費者の立場からしたら、いいものが安いのはうれしいですけれども、社会全体から考えると、あんなに質の高いものを3,000円で売らなければならないのは問題です。日本の物価も上がっているのに、世界標準からして安すぎる。価格が安いということは、それを作っている人たちの賃金が安いということです。たしかに名目上の賃金は大企業では上がっているし、株価も上がっているから景気は良くなったと言われますが、そんなのウソですね。物価の変動を加味した実質賃金はもう2年近くずっと下がり続けています。賃金が下がれば需要も縮小しますから、本当はデフレ脱却なんてできてないんです。

国レベルの経済問題は個人の家計とは違いますから、モノが安いからといって喜べないんです。一消費者としての観点と、国や社会のマクロな観点とは違う。だからあんな美味しいフレンチの昼食がたった3,000円で食べられるのはうれしいけど、同時にこんなことでいいのかとも強く感じました。

さて「不死と月見草」というテーマで何を話そうかと考えながら、前置きをしているのかもしれませんが、室井さんはどんなことを話すつもりだったのかな。ちょっとこのテーマでは想像することができないのです。

まあこのタイトルの元ネタが太宰治の「富嶽百景」であるということから話の糸口を探してみると、室井さんといろいろ文学の話をした中で、太宰治については話したことはないんですね。それはなぜだろう。坂口安吾については、室井さんは自分の大学院の演習発表でも取り上げたことがあり、二人で何度か話をしたこともあるのですが、太宰治については記憶がない。といっても避けていたわけではなく、二人とも読んでいたと思いますが。たぶん太宰治が嫌いだったんじゃなく、太宰を神格化する文学ファンが嫌いだったのかもしれない。当時小説を書こうとする若者たちにとって、今よりもずっと太宰の存在は大きかったですからね。

太宰作品としては、「走れメロス」は国語の教科書に載っているのでよく知られていたり、特に文学ファンじゃなくても「人間失格」や「斜陽」といった作品はちょっと手にとってみた人は多いかもしれません。それに比べると「富嶽百景」は、それほどでもないかな。どんな話かという、まず「富嶽」というのは富士山のことで。他の名所と同様、富士山も「八景」とか「三十六景」というふうに言われるのですが「百景」というのは多いですね。舞台は富士の見える場所なのですが、富士山についての小説ではなく、太宰治自身の自伝的な話です。昭和十三年だったかな。太宰治が天下茶屋という、富士山の見える峠の茶屋に滞在する話と、それから太宰が尊敬していた井伏鱒二という先輩の小説家の世話で、結婚相手となる娘さんに会うというエピソードがあります。

そういう個人的なエピソードの合間に、富士山の風景について語られるのです。富士山のイメージは美術や文学にさんざん描かれ、大衆文化の中にも広く入り込んでいて、昔は銭湯の浴槽の壁のタイル画などにもよく見られた。今もあるかもしれませんが、やはり関西よりも関東の方が多かったですかね。僕の祖父も静岡出身だったので、富士山の姿には親しんでいました。たしかに日本人にとっては特別な山で、それだけにそのイメージはある種ステレオタイプ化している。

主人公がバスに乗って山道を走っていると、片方の窓から見事な富士の姿が見えて、乗客がみんなそちらを向くのです。今でも東海道新幹線で新富士の近くを通り過ぎる時、富士山がきれいに見える日だとそこらじゅうでスマホで写真を撮っている音が聞こえたりしますね。あんな感じだと思います。けれども主人公はそんなふうに関員でいかにも富士山というような景色を褒めるのが嫌だった。すると一人の年配の女性が、他の人たちから顔を背けて反対方向の窓を見ている。自分はそれを好ましく思って、真似をして反対の窓を見ていたら、そのおばあちゃんが「おや月見草」って呟くんですね。そこから「富士には月見草がよく似合う」という有名なフレーズが出てくる。

なんで似合うのか？とも思いますよね。でもこんなフレーズがとても太宰治らしいとも感じます。自分の弱さを無造作に投げ出して、世間の凝り固まった常識に対して「ウソつけ」と言っているような感じ。富士と月見草という対比はたしかに印象的ではあるけど、これはいったい何の対比なのでしょう。富士山という雄大な存在と、道端に一輪だけ静かに咲いている月見草。けれども月見草を大きく前景に配してそれを通して富士山を遠望すると、両者が釣り合うような絵も想像できます。

これから自分が結婚するというこの物語のプロットと関係づけてみると、雄大な富士に対して月見草というのは、女性的な優しさというイメージも多少はあるでしょう。あるいは月見草とは自分自身かもしれないですね。富士が個人を越えた「文学」という存在で。太宰っていう作家は、自分の文学がどうこうというのは別に、文学というのはこれからどうなるんだということを常に

本気で考え続けていた人です。その点では三島由紀夫と同じで、個々の文学者や作家が成功しようが失敗しようが、そんなこととは関係なく「文学」という本質的な存在について常に考えていた人です。

自分は作家として売れるか売れないか、評価されたり賞をもらったりして一喜一憂する儂い一輪の花に過ぎないんだけど、それとは無関係に「文学」というものは存在する。その「文学」と自分との関係。自分にとって文学とは何かではなく、「文学」にとって自分とは何なのか。こう考えると富士山が「文学」で、それを気にしつつ分からないながら書いてゆくしかない作家としての自分が、月見草ということになるのかもしれない。一人の作家は野花のように束の間の命しかないが、その自分が富士山という「文学」に似合う存在になれるだろうか、なればいいが、というような感じかな。

それは僕の解釈ですが、それにしてもこの作品は富士山の眺望、これから結婚に向かうという背景もあって、太宰治の作品の中では、比較的明るい調子の開かれた感じの物語で、僕は好きですね。全体的に希望がある、未来を向いているような雰囲気です。だから室井さんも最終回のタイトルに参照したのではないかなと思います。

とはいえ 室井さんがこのタイトルで何が話したかったのか、それは全然分からないんです。だけれども「不死」というテーマがあるので、ちょっと無理して文章の断片を三つ、参考資料にしておきました。最初のは、僕が佐伯啓思さんが監修されている『ひらく』という雑誌に最近書いたものです。そこに「美学のアップデート」というエッセイを連載していたのですが、その第7回で、最終回なんですけれども「死なないために」という副題をつけました。その一部です。

その中で、これまで二回ぐらい対談したことのある吉森保さんという細胞生物学者のことを書きました。前にもちょっと話題にしたことがありますが、この方はノーベル賞を受賞した大隅良典さんと共に「オートファジー」という分野を研究してきました。「オートファジー」って何かというと、「オート」というのは自分という意味で、「ファジー」というのは食べるということです。「自食」、自分で自分を食べるということ。何が何を食べるのかというと、細胞が細胞自身を食べる。「食べる」といってもそれは比喩で、実際には細胞が自分自身を構成しているタンパク質分子を絶えず分解して、新しく作り直しているという現象のことです。

この現象自体は1960年代から知られていたのですが、詳しく分かってきたのは1990年代以降です。最初は、そんなこと研究して何の役に立つのかと思われていたらしいのですが、現代ではいろんな病気、がん、認知症、パーキンソン病、糖尿病などの予防や治療、またアンチエイジング（老化防止）に応用できるのではないかという期待から、広く注目されるようになりました。

オートファジーとは何かというと、吉森さんの説明によると、たとえばこういうことなんです。新車を買っても毎日乗り続けているとだんだん傷んでくる。でも、例えば今日はエンジンのこの部分だけを新しいものに取り換える、明日はギア、次の日は冷却系統、というふうに毎日少しずつ部品を新しいものに置き換えていけば、車はいつまで経っても新車のままである。つまり、オートファジーが機能していれば、その細胞は歳をとらない。老化がないということです。

ということは、オートファジーが適切に働いていれば、私たちは老化もしない、したがって死ぬこともないということになります。それはある意味、人間の夢だと思える人いるでしょう。では、そういう機構が細胞の中にあるのに、ではなぜ私たちは歳をとると身体が衰えてゆき、最後には死ぬのか？ それは、細胞が何らかの仕方で死ぬようにプログラムされているからということなんです。その理由はまだわからないらしいです。説明としては、個体はいつまでも生きていたいかもしれないけど、種にとっては個体が死んでいってくれた方が都合がいい、ということかもしれない。これも最初に話したお金の話と一緒に、個体の目線でいくといつまでも生きて、でも

種から見ると違うということかな。

それはともかく、オートファジーが病気を治したり老化防止に役立つかもしれないということが知られると、ものすごいお金が投資され始めたらしいです。不老不死を求める人間の欲求というのは強いですから、そういう期待が持たれた瞬間、世界中から注目を浴びて莫大な研究費が来るようになります。今まで考えられなかったような、若さを保つ化粧品とか、老化を遅らせる薬とか、そういうものを開発できたら大儲けできますよね。

まあそういうことから今は注目されているらしいんですが、僕は自分自身がいつまでも若いままにいられるみたいなことにはあまり関心がなくて、それよりもオートファジーのメカニズム自体にすごく関心があったんです。細胞が自分を壊しつつ作り変えていけばいつまでも老化しないということは、私たちの人生観にどんな影響を与えるか。そうしたことを吉森さんとお話したんです。

つまり、僕が今まで生命というものに対して持っていたある種の先入観というか、そういうものが崩れ去るような経験をしました。つまり、命あるものは必ず死ぬ、生あるものは衰える、つまり老死は生きとしける者にとって宿命であるというようなことを、生命について考えることのベースにしてたんですね。生きているものにとって死は不可避な宿命だと、何となく考えていたんです。ところがオートファジーという観点からみると、そうじゃないというんですね。

要するに老化や死は後からプログラムされたものであって、生命それ自体というのは、ほっておくとずっと動き続けるんだと、オートファジーという観点から見るとそう見えるということなんです。これは面白いなと思った。ふつう機械はほっておくとだんだん壊れていきますからね。現代の機械はある程度自分自身を保守しながら動くものもありますが、永遠に動き続けることはない。けれども生物は、オートファジーによって自分をメンテナンスすれば理論的には死ぬことはない、実際死なない生物というのが本当に存在するわけです。

ベニクラゲという生き物だったかな。大人になって有性生殖してから、もう一度幼生のポリプに戻れるのだそうです。うらやましいと思う人がいるかもしれないけど、クラゲだからね。それに死なないといっても寿命による死がないというだけで、他の生き物に食べられたらもちろん死にます。でないと海がベニクラゲだらけになってしまうでしょう。

でも細胞が本来永遠に生きる力を持っているもので、老化や死は後からプログラムされたものだとなると、そのプログラムを書きかえて若返ったり不死になったりできるんじゃないか、と期待するかもしれません。どうでしょう。ぼくも中学生の時だったらそう思ったかもしれない。でもたぶんもう中学生じゃないので、肉体の不死が本当に望ましいかどうかというのを考えてしまうんですよ。これは吉森先生ともお話ししたことで、この講座でも紹介した日本記号学会の機関誌『セミオトボス』の最新刊「生命を問い直す」（2013年）に出ています。

不死は本当に望ましいか、という話をしたんです。これは文化差もあるんですかね。国際学会のようなところで不死の可能性のようなことを話すと、僕の偏見かもしれないけど、北米文化圏のプロテスタントの人たちは、不死は人間の夢だというようなことを前提として持っているように感じます。1990年代にスコットランドの研究者がクローン羊のドリーというのを作って、大型哺乳類のクローンが可能ということを実証し世界的に話題になったことがあります。その時も北米圏の大金持ちから、お金はいくらでも出すから自分や家族のクローンを作ってくれという要望が来たそうです。自分のクローンを作っても自分が不死になるわけではないですけどね。

不死が望ましいかという問いに対しては、日本人あるいはアジア人はそれほど当たり前のようにイエスとは考えられないのではないのでしょうか。少なくとも僕は疑問を感じます。それではいつ死んでもいいのか、明日死ぬぞと言われてたら嫌ですけどね。かといって永遠に生きたいかと言

われると、それも嫌だ。皆さんはどうか分かりませんが。子供の頃に手塚治虫の『火の鳥』「未来編」というマンガで、その中に出てくる主人公のマサトっていう青年が、火の鳥によって死なない身体に変えられて、核戦争で滅亡した地球にもう一度生物が誕生して何十億年もかかって人類に進化するのを見守れと言われるお話を読んで、不死とはどんなに恐ろしいものかと思った、と言ったら、吉森さんも同じですと言っていました。

さらに言えば、もしも将来何か技術的な方法によって、寿命では死なない身体になっても、事故や病気ではもちろん死ぬわけですよ。そしたら、薔薇の棘から白血病になって死んだと言われるリルケみたいに、ケガをしたり身体のちょっとした不調がとんでもなく怖くなるんじゃないか。『火の鳥』の主人公は寿命だけじゃなく何が起ころうとも死なないという設定なんだけどもね。

本当に不死になったら、人はたぶん自殺するのではないかな。人生が永遠に続いたら、人生の意味がなくなってしまうからです。肉体的な生が時間的に有限であることは、生きることに意味を与える基本条件ではないかと思うのです。

資料の二番目に引用したのはちょっと哲学的な内容なんですけど、これまでも何回も紹介した『情報と生命』（1993年）の最後の章からです。「死について」というタイトルがついています。この出発点になった問いは、死を遠ざけるとか死を迎えるとか言葉では表現するけれど、死というのは本当に何らかの出来事なんだろうかということなんです。ここで言っている死というのは、自分の死ですね、人の死じゃなくて。人の死というのは、これは出来事として観察したり経験できるんです。つまり、今までいた人がなくなるんだから、存在していたものがなくなる、存在と無、0と1みたいな普通の論理的なカテゴリーで捉えることができる。けれども自分の死というのは違うだろうと。

自分の死というのは本当に出来事として経験できるのか。死への不安とか、死に至るまでの苦痛とか、そういうものは経験できると思います。けれども死そのものはどうなのか。そうしたことを考えていますが、今となってはどの部分を室井さんと僕のどっちが書いたかわからないんです。この『情報と生命』というのは共著だけれども、どっちがどの箇所を書いたかわからないようにしようという方針で作りました。互いに書いた文章をメールでやりとりして、といってもその頃はまだメールといってもインターネットではなくパソコン通信で送り合っていたんですよ。それで相手にもらった原稿を修正して送り返すのですが、今のワープロみたいに誰がいつどこをどう直したかということが記録されないの、何回かやりとりを繰り返しているうちに、どの箇所をどっちが書いたのか、本当にわからなくなっていく。その感覚が面白いといって作った本なんです。

刊行が1993年で今となってはもう30年以上前のことですからね。とはいっても、こういう言い方は室井さんしかしないだろう、と今読んでも分かる部分もあります。僕は基本的に、相手の表現をあまり直さないの。そこからするとこの最後の章に関しては、多分僕の書いた部分が多いような気はします。

それはともかく、死が有から無へ移行する出来事だというのは、私たちの脳、それが可能にする思考や認識の力に限定されているわけですが、自分の死というのはそういった限定そのものの消滅です。だから、死を出来事として理解することは不可能だろうと考えているんです。つまり死というのは、私たちが考えられる限界の外にあるということです。無に帰するといったことではない。

死が無に帰することじゃないと言うと、今度は人間はえてして魂は不死であるとか、死後の生

があるとかいうふうに考えるけれども、それもまたおかしいんじゃないか。その死後の生は、いろいろな物語とか、宗教的なビジョンとして描かれてきましたが、天国や地獄に行ったり、亡くなった人の霊が語りかけてきたり、そういうのって普通に生きてるじゃないかと思うんです。死が生きている私たちの思考で理解できるということ自体がおかしい。

死後の生について想像力が描き出す様々な物語は面白いけれども、結局は我々の脳という思考機械が産出した空想である。すると、死という問題に至る道を阻んでいるのは、私たちの思考そのものであるのではないかということになる。だったら、思考しなければいいのか。たしかに、瞑想や坐禅のように思考を止める訓練があります。これは簡単ではない。思考は訓練しないと止まらないんですね。何も考えないでおこうと思っても、何も考えないようにしようと考えている。では何も考えないようにしようとする考えも止めようとしても、キリがない。勝手に進んでいく。眠っても脳は動き続けています。脳も思考も自動機械なので、自分でコントロールできないんです。

心臓の鼓動を遅くしようとか、腸の蠕動運動ぜんどううんどうを2分だけ止めようとかできないでしょ。脳も内臓ですからね。身体の基本機能のほとんどは自分でコントロールできないですけど、呼吸だけは少しコントロールできます。だから瞑想的な訓練をするときには呼吸を手がかりにするのだと思います。

私たちの思考も認識も生きている身体に条件づけられている。だから死と不死について真正面から考えようとしても難しいです。そこで室井さんはちょっと方向を変えて「不死と月見草」というテーマを思いついたのではないかなとも想像します。最初に言ったようにこれは「富士と月見草」をもじったものですが、「不死」と「富士」は単に音が似ているだけというわけでもありません。ただのダジャレではないんです。もちろん富士は山ですから、人間の一生よりもずっと長く存在し続けてきたわけです。永遠ではないけど、人生と比べたら永遠に近い。そして富士山が不死というテーマに関わってくる物語があって、それが下敷きになっていると思います。

それは竹取物語です。かぐや姫のお話ですね。太宰治もこの作品を書くときに意識していたと思います。さて、かぐや姫というのはなんで竹の中にいたのか分からないんですけど、もともと月世界の住人なわけですね。人間ではなくて天人です。天人というのは姿は人間に似ているけれど、人間よりも高いレベルの、より清浄な存在です。仏教が入ってくると天人もまた衆生であり輪廻からのがれてはいない、つまり仏ではないのだけれど、人間よりはずっとハイレベルの存在なわけですね。

そのひとつの特徴として、天人には寿命がない。不死なんです。その意味では、日本神話における高天原の神様たち、天孫降臨する前の神様と同じなんです。天皇は神なのになぜ命が限られているかという、それは瓊瓊杵尊にぎのみことが大山祇神おおやまつみのかみの娘である石長比売いわながひめを醜いと拒んだので、岩のような永遠の命を失ってしまったからです。つまり、元々は不死だったということですね。

さてかぐや姫が美しい少女に成長して求婚者が現れます。すると彼らに、私と一緒にいたいんだったら、これ探してきてください、という無理難題を出す。龍の首に付いている珠を取ってこいとか、本当に無理難題です。かぐや姫、ちょっと人間的感情を持っていると思えないんですよ。だって、求婚者と結ばれる気がないんだったら、断ればいいだけじゃないですか。それを、わざわざあんなことを言って翻弄させるって、なんて性格悪いんだと思って読みました。

でもどうしてそんなことをするのか、最後にはわかるんです。いよいよ月からお迎えが来て帰らなきゃならないとなった時に、月の人々がかぐや姫に、あなたは地上に来て人間の不浄な食べ物食べ物を口にしたから、この薬を飲んで元の身体に戻りなさいと言う。その薬を飲むと不死になるんです。そして天人の衣を着せる。羽衣ですね。でもこの羽衣を着ると、人間的な感情がなくなつ

てしまうんです。かぐや姫は、長い間自分を育ててくれた父母が自分と別れるのがつらいと感じていることを知っている。みんな嘆き悲しんでいるし、最後には帝も出てきます。でも羽衣を着ると、そうした感情が全部なくなるのです。つまり不老不死の天人の世界に入ることは、人間的な喜怒哀楽の感情を捨てるということと引き換えなのですね。いわば、不死になるということは機械になるということなんです。

そのことが分かっているので、かぐや姫は帝に手紙を書いて、不死になる薬を託します。そして衣を着ると、先ほどまで別れがたいと感じていた養父母を見ても何も感じなくなって、月に帰っていく。この物語を読んだ時に感じたのは、生死の境というのはそこに有るのか、ということでした。つまり、人間的な思考や感情が通用する世界と、そうではない世界との境界です。

しかしこの世界から見ると、向こう側の世界は見えないのです。不死の薬をもらっても、かぐや姫がいなくなったこの世界で不死になっても何の意味があると帝も言って、家来を呼んでこんなもん捨ててきなさいと命じる。どこに捨てるのですかという、世界で一番天に近い場所で。この時代の知識では富士山ですよ。それで、富士の火口に投げ入れる。この時代、富士山は活火山ですから。富士は不死と音が通じるだけでなく、従者がたくさん火口まで登ったので、土（サムライ）に富む山という語源の説明がある。

最後の引用は最初と同じテキストで、僕の「美学のアップデート」という連載からなんです。ちょうどそれを書いていたのが、去年のこの講座が始まる直前ぐらいだったので、室井さんが亡くなってこの講座をどうしようかって考えていた頃です。それで、これは室井さんの追悼文集にも寄稿したエピソードなんですけれども、1999年にね、ドイツのドレスデンという町で国際記号学会というのがあった。それに参加するために二人ともドイツに行っていたんです。少し遅れて、文化人類学者の山口昌男さんが来ることになっていた。室井さんや僕はその頃日本記号学会の中では若手と呼ばれていて、実際はもう40歳過ぎて若手じゃなかったんですけど、山口さんが僕らをたきつけて何か面白いことしなさい、という刺激を与えてくれた。

それで、山口さんが来るのを迎えようということになって、ドレスデンの山口さんが泊まる予定のホテルのバーで、二人でビールを飲みながら待ってたんですね。しかし山口さんは予定の時間が来てもなかなか現れない。それでかなり長い時間、ビールを飲みながら二人でいろんな話をしてたんです。その途中で室井さんが突然、死は人生の終わりじゃないと言ったんですね。どうして急にそんな話になったのかはよく憶えていないんですが。それで彼は、死に至る肉体的苦痛はできれば避けたいけれども、自分は死そのものは怖くないって言ったんです。それどころか、死によっていったい何が起きるのか、自分が何を体験するのか楽しみだって言う。

僕も同じように、子供の頃から死そのものが怖いと思ったことってあまりなかったんです。たしかに、死に結びつく苦痛や恐怖というのはあるんだけど、死そのもの、つまり自分がこの生きている状態から、存在しなくなること自体に対する恐怖というのは、感じたことがないのです。死ぬのが楽しみとまでは言わないけど。室井さんは楽しみだって言う。大体、話を盛る人ですからね。それで面白いなと思ったんだけど、そのことから僕は、死はそもそも経験の外にある、死は経験できないという主張を思い出したんです。

それはウィトゲンシュタインという、20世紀の初めに活躍したオーストリアの哲学者による言葉です。西洋哲学史では有名な人ですけれども、この人が書いた『論理哲学論考』という、日本語では堅苦しい表題になる本なのですが、これは短い断章が組織された不思議な書物です。哲学の本といってもいろいろあるけど、カントやヘーゲルみたいに長い文章が綴られる形式もありますが、断章のような文体で書く哲学者もいます。ニーチェもそうですが、ウィトゲンシュタイン

の特異な点は、短い命題が構造的に組織されていて、個々のパートの一つひとつに13.3.2とかナンバリングがしてあって、何かアプリのバージョンみたいに階層性を持っているんです。ユークリッドの幾何学がモデルになっている。これも西洋哲学では伝統があって、一番有名なのはスピノザの『エチカ』です。公理があって定理があって証明がある。そういう階層性を持ったスタイルで書かれているんですね。

で、ワイトゲンシュタインのその本の中の、こういう箇所を思い出したんです。その時は正確に思い出せなかったから後で調べたんですけども、こういう断章です。死は人生における出来事ではない、という部分ですね。人は死を経験することはない、と。そして永遠というのは時間が際限なく続くことではなくて、むしろ無時間性、時間が存在しないことであると。時間が存在しないとは何かというと、それは現在に生きることだと言う。つまり現在に生きることが永遠に生きることだと言うのです。これには強い衝撃を受けました。

無時間的な生、つまり現在を生きることが永遠に生きることである。永遠に生きることが不死であるとすれば、現在を生きることが不死なのです。しかし私たちはふつう、時間化された不死のことしか考えていない。50年の寿命が80年になるとか、80年が100年になるとか、それを延長していけば永遠に辿り着けるかのように思っている。でもそれは、生の時間的、量的延長を永遠への接近みたいに勘違いしているだけなんじゃないかと。

それに対して、時間が存在しないことを永遠と考えると、現在この瞬間に生きる人が永遠に生きていることになる。永遠というものをそういうふうに捉え直すということができる。すると、人生の残り時間があと何年だとか、終わりを引き延ばすことがより良い人生だとか単純に言えなくなる。私たちの視野に境界がないように、人生には終わりがないとワイトゲンシュタインは言います。もちろんこんな認識は、私たちが社会の中で生きる常識には合わないし、世間ではこんな言い方は通じません。それでも、こうした認識を持つことは重要だと思うのです。

世間的な常識として私たちが「永遠」と言っているのは、単なる時間的持続の延長というか、その延長の極限みたいなものに過ぎないですからね。「持続可能性」とか言われていますが、それが意味を持つためには、少しでも長く持続した方がいいという無条件の前提がある。個人の人生で言えば「延命」ですね。もちろん現代ではただ生きていればいいと単純には言いませんけれども、「ウェルビーイング」とかQOL(クオリティー・オブ・ライフ)、生活の質みたいなものも加味するという風に言われますけれども、それでも結局は数値化された指標ですからね。時間的延長と基本的に異なるものではない。質と言っているけど結局量なんです。

つまり時間であれ何であれ、量的指標でしか生の意味を評価できなくなっている。それは偏っているのではないかということを書いたのが、この最後の文章ですね。もちろん量的に考えてはいけないと言いたいわけではなくて、現代に生きている限り、仕事でも生活でも相対的な量的指標によって影響を受けざるを得ないんだけど、同時にそうではない質的なリアリティーを生きていることも当然です。そのことを忘れすぎているというか、あまりにも軽んじていることから、現代の生きづらさが生まれていると思います。昔の人は今の私たちより、当たり前のこととして知っていたんじゃないかと思いますね。

昔といってもそんなに大昔じゃない、戦前とか、一世紀前とかですね。現在の私たちよりも、生きているという状態をいつどんなことが起こるかもしれない、危うい均衡の上にあるという自覚を持っていたはずなんですね。今のように医療も発達しておらず、栄養状態も不安定で、結核のような不治の病になる危険に晒されていた。死が自分をいつ襲うかも知れない、そういう自覚が誰にもあり、その覚悟が今の私たちよりは強かった。金持ちや上流階級の人でも貧しい庶民も、おしなべて強かったと思います。そういう状況では、人間は一年でも長く生きた方がいいとか、

量的に評価できる指標で人生の値打ちを計るとか、そういう考え方もないわけではなかったけど、同時に量的な指標とは全く異なるリアリティーが生を貫いているという感覚があったと思います。

文学や哲学などの人文学の研究をしてきていいことは、現代の私たちが文明の進歩の最先端にいるわけではないということがはっきり分かることです。たしかに科学技術は進歩して生活は便利になっているかもしれないけど、人間の世界認識や道徳は少しも進歩していません。むしろ後退していると思えます。文学や哲学に親しむことのメリットは、現代人よりも優れた昔の人たちと仲良くできることだと思います。

人文学、哲学の研究をしてきて、自分はやっぱり昔の本を読むことが、平均的な人よりはずっと多いです。昔の人の方が仲がいいんですね。それに対して、今の時代全体の風潮としては、新しい方が進んでいるに決まっている、昔は遅れていた時代であるという先入観です。科学者だけじゃなくて、一般の人にも強い。これは全くウソで、こういう偏見がいろんなものを貧しくしていると思えます。

最後に、これまで遠くから何回か参加してくれた人が、今日は最後だから行きたいと思っていたんだけど、仕事で行けなくて残念だから、メールで質問させてくださいっていうのが来ていましたので、それを紹介して終わりにしたいと思います。次のようなものです。「不死と月見草」というテーマを前に、死者との対話とかいろいろ考えていた。今日の講座で先生は話題にするかどうか分からないが、できれば漫画家の鳥山明の死について触れていただきたい、ということです。

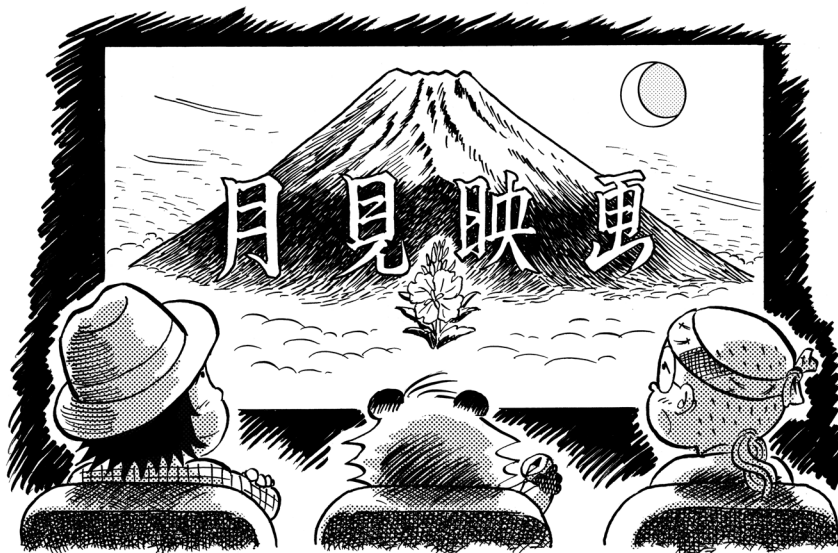
それで、僕が鳥山明について何か論じることを期待してるのかと思ったら、そうじゃないんですね。鳥山明は昭和から令和に至る何年もの間、数々の名作を生み出して、漫画にとどまらず、アニメやゲームにも多大な影響を与えてきた存在ですけれども、彼が死んだというニュースをテレビの報道で見ていると、街頭インタビューで気になる言葉を聞いたって言うわけね。記者が、鳥山明さんが逝去されたことについてどう思われますか?って質問したんです。すると街を歩く普通のサラリーマンらしい男性が「大きな損失ですね」って言った。「大きな損失」なんて言葉を、人の死に対して即座に答えられる、それはどういうことか。

たしかに、マンガ界にとっては大きな損失です、というような、各業界の人がその業界での有力者を失ったことを嘆く言葉として、聞いたことはあった。それはそうですね。マンガ業界にとって、彼の死は大きな損失だっていうならわかる。しかし今回はそうじゃない。一般の人が、有名人が死んだことを経済的な損失、国にとってマイナス作用を持つみたいな意味で、当たり前のように発言しているのです。人はいつから他人の死を自分ごととして語ることなく、いっばしの経済人のような言葉を語るようになったのか。私は人の死に対して俯瞰したような言葉を吐きたくはない。有名人の死についても、自分の個人的経験の中で、少年時代に友達と競って読みましたとか、自分は興味はなかったけど流行ってましたねとか、そういうことを言うのが自然じゃないか。「損失」とは何を言ってるんだという、そういう趣旨です。

私たちは、自分の身体をも数字に置き換えるように強要される社会に生きている。パフォーマンスは数字にされ、どれくらいの働きがあるかというふうには評価される。結婚する時にも年収はいくらか、健康な身体とは血圧がこれぐらいの値でないといけないとか、そんな世界に生きている。生きている時ばかりではなく、死に行き着いた時も数値的な評価が先行し、〇〇界にとっての損失だとか言われる。ただ、今気が付いたのですが故鳥山明氏はゲームのドラゴンクエストのシリーズに深く関わっておられます。ゲームではプレイヤーは冒険をするのですが、アバターの経験値を上げたり、アイテムを手に入れることによって強くなったり、生き抜いてゆく。それらは

全部数値表示されます。自分がこうした数値化された人生観の普及に加担した人でもあるのです。その意味ではちょっと皮肉なものも感じました。その数値化された生、人生ね。ゲームをやっていると何か数値化された人生、自分の分身が数値化された人生を送るということに違和感がないような、そういう訓練が自然にされてしまうと。そのことに何か皮肉なものを感じたという、そういうコメントでした。

最後に自分で突っ込んでいるような終わり方だけど、すごく面白いコメントだから、最後にこれを紹介していったん終わることにします。



イラスト／谷本 研

参加者との対話

安藤 では後半を始めたいと思います。

発言者A 荒川修作について、期待してきたのでコメントしていただきたいのが一つ。あと私は社会学者で計量的な社会学で、アートを研究しています。はっきり言うと、哲学に対して若干不満で、別にラトゥール (Bruno Latour) はいいんですけども。我々は、もっと計量化していますし、哲学的な思考はもう限界だと思っていて、記号的な解釈というのや、現象学の解釈は、アートに対してもちよつと勢いはない。

社会科学的なアプローチ、関係性美学というのはこれからだと。社会学じゃないとアプローチできないなと。それに関してどう思うかコメントをいただきたい。

まず話を聞きたいのは、荒川修作についてで…。

吉岡 荒川修作について、どういう観点からの質問か分からないけれど、今日紹介した『ひらく』という雑誌に寄せたエッセイに荒川修作の話があります。「死なないために」というのは、荒川修作からの引用なんです。

荒川修作という人は、ずっと「人間は死んではいけない」と言い続けてきた人なんです。「人間は死なないんだ。死んじゃいけない」と言うんですね。「死ぬことは法律違反だ」とか言うんですよ。じゃあその場合、彼が言っている「死なない」とはどういうことなんだろうということ僕自身も考えてきたので、ああいうタイトルを引用しました。

で、しかも荒川さんが亡くなった時に、大阪の国立国際美術館で荒川修作による作品展、ちよつと見ると棺桶みたいなインスタレーションを展示していたんです。「死なないための葬送」というタイトルで、彼はその会期中に亡くなったんです。

僕はそれに強い印象を受けました。僕自身は、荒川修作さんとそれほど個人的なつながりがあったわけではないんですが、京大の前に勤めていたIAMAS (情報科学芸術大学院大学) という岐阜県大垣市の学校から学生たちを連れて「養老天命反転地」という、養老公園の中にある荒川さんの作品を見に行っただけです。野外ですり鉢状の、公園というか何というか、独特の空間なのですね。荒川さんはニューヨーク在住だったけど、毎年帰ってこられてその養老天命反転地の一番底の部分でトークをされるというのがあって、二回ぐらい学生を連れて聞きに行っただけでした。

その休み時間に荒川さんとちよつとだけ言葉を交わしたことがあるんです。彼の講演というのは、基本的に何を言っているのかよく分からない。日本語で話されるのですが、長らくニューヨークに住んで、奥さんもアメリカ人で英語の環境の中にいたから、日本語を忘れかけたということもあるのかもしれないけれども、そんなレベルじゃなくて、もっと根本的に何言ってるか分かんないんですよ、本当に(笑)。

だけど分かるところだけ思い出して言うと、「私は美術家とか言われているけれど、本当は建築家なんだ。私は都市を作りたい。三鷹に家を作ったが、あんなものじゃだめなんだ」と言って、来てる学生たちを見て「誰か君たちのお父さんが資産家が私に100億を出してくれないか」みたい、そういうことを言うんですね。それは短い対話だったけれども、荒川さんが「死なない」ということをなぜそんなに強調するんだろうと思った。それが、確かに今指摘していただいたよ

うに、僕の今回の話の遠い動機になっていることは確かだと思います。

それ以外の点についても簡単にお答えすると、定量的・計量的な科学研究をされている方にとって、僕がしゃべっているようなことが、まるでその研究領域を否定しているかのように聞こえることがあるらしいですけども、それは間違ってると思うんですね。つまり、現代我々が置かれている知的な環境の偏りというのは、哲学者がしゃべることを、まるで数量化された世界そのものがいけないと言っているかのように、そこに対立があるかのように誘導されていく傾向が強いんです。むしろ、この点が問題だと思うんです。全く僕は定量的科学を否定しているわけではなく、むしろ非常に興味を持って見えていますから。

それから聞き捨てならない、耳が痛いというか、芸術とか現代のアートの事について、哲学の説明にはもはや力がないみたいなご意見もありました。それはね、正確に言うと、哲学に元気がないんじゃないで、哲学者に元気がないんです。これは否定できないです。しかし僕は、哲学は重要だけど哲学者なんてどうでもいいと思っているんです。

僕は過去の人たちといつもやりとりしているので、やっぱりスピノザやカントが設定した問題というのはまだ解かれていないと思っているんです。だからむしろ、何世紀も前の彼らは元気があると思っているんですね。彼らの存在は非常に大きいと思っているんですけれども、確かに現代の哲学者は元気がないです。

だって二十世紀前半だったらマルティン・ハイデッガーとか、好き嫌いとはともかく時代を代表する存在としてサルトルとか。この時代にとって、この人が問いかけたこの問題が大事だろうみたいな、そういう存在がいたんです。哲学という課題を背負った哲学者という存在がいたんですよ。今、そんな人見ないでしょう？ 今。時々、メディアで哲学者として注目される人がいますけれども。サンデル教授とか、マルクス・ガブリエルとかいますけれども、話を聞くといいこと言うなくらいは思うかもしれないけれども、我々の時代にとって切実な問いを突き付けて、その声がずっと消えないという、そんな経験をさせてくれる哲学者はもういないから、確かにご指摘のとおり哲学者は元気がなくなったということは、受け入れざるを得ない事実だと思います。なぜ元気がなくなったのか。それについては、また回を改めて論じたいと思います。

発言者B 今までの会は横目で、隣の講堂でいつも面白いものがあって、そっちに出ていたんですけれども、今日はどうしても出たいと思ったのは、荒川修作の名前が出ていたからで、私にとって荒川修作は心酔するというレベルではわからない、ただ謎です。強烈な謎で、幸いにもお亡くなりになる2週間かの時にある学会で彼が招かれたんですけれども、まるっきりわからないだけじゃなくて、そこにいる人たちを馬鹿にして「こんな馬鹿なみんな」とか。お医者さんのグループだったんで精神科の人が怒り出して「お前、帰えれ！」って言った人がいた。でも、彼は帰らないで、やはり訳のわからない話をされる。それは何も実りがなかったんですけれども、懇親会で私はすごく嬉しかったんです。わかる言葉が伝わったんです。彼は「僕は中学生の頃、お医者さんについて行って、もう助からない患者さんがいて、僕は抱きしめてあげるんだ」それが一つ。

もう一つは自分のことを研究している人の話になった時にフランソワ・リオタール (Jean-François Lyotard) の話になった。彼は本当に荒川修作のことが好きで、論じた本を書き上げて彼に見せたんだそうです。荒川は「お前、こんなくだらぬものを書いて、こんな燃やしてしまえ」って言ったら、リオタールはポロポロと泣きながら彼の目の前で焼いたそうです。僕は荒川というよりも、リオタールという人に対して感動しました。その後、荒川さんが付け加えたのは「だからね彼の娘が今、僕についての博士論文を書いていんだよ」その三つです。

ただ、伺いたいのは、本当に謎なんですけれども、人は死なないんだよと何度も言っています。そして今日、『死なない子供、荒川修作』というDVDを見てきたんですけど、やっぱり分からない。ヒントとなるかなと思ったのは「AをBとして知覚せよ」というのは何度も繰り返されるんです。で、赤ちゃん、一つは分子運動と人間の精子の運動。それから実際にドキュメンタリーの中でおばあさんがなくなる、介護されてる顔がA、そして亡くなった死者の顔がBなんです。有機体として建築としての身体と見なす。有機体として見直すということは、物は物質ではないという形になって、全てのものつながりのあるものとして人間の身体を捉えたときに、ひょっとして死なないと思えるのかどうか。

吉岡 ありがとうございます。今のお二人の方の質問で、あらかじめ期待してきたという事を聞いて思い出しました。僕は予告に荒川修作の話をするって書いちゃったんですよね。それを忘れていて、前半の話の中では言及するのを忘れていました。すみません。

さっき現代の哲学者に元気がないと言ったけれど、職業的な意味での哲学研究者なんてどうでもよくて、荒川修作は僕は哲学者だと思っているんですね。体系化された哲学の著作は残してないけど、そんなことはあまり関係ないと思います。荒川修作の、普通の人には常識的に捉えられないような論理に基づいた話を聞いて、禅問答みたいだという人もいます。でも、それも僕は嫌なんです。禅問答なんてあまりにもステレオタイプというか。別に禅が特別なものではなくて、私たちは誰でも常識的な世界観や論理を逸脱してものを考えようとする、ワケのわかんないことを言うてしまうんです、人間というのは。

それはその人がその場、その瞬間で矛盾を生きているから、力があるのです。それを後から言葉だけ回収して、このわけのわからない言葉に深遠な意味があるんだみたいに考えるのはおかしい。いわゆる禅問答だって本当はそういうもんじゃないと思います。本当はその場その瞬間を生きてることが禅だと思うんだけど。けれどもいわゆる禅っていうのは、言葉の表層だけというか、矛盾みたいなものの中に真理があるんだみたいな、形式化された知識に墮落していると思うんですね。実際、そんなことしか言わない禅僧もいますからね。

だから、そういうものにとらわれずに考えるほうがいい。言語的矛盾として現れてくる表現というのは、その人が必死で、その瞬間を生きた痕跡が、たまたまそういうワケの分からない言語表現という形をとって残っているだけだから。

荒川修作のことをあまり知らない人は、さっきから何のことを喋ってるんだと思っているかもしれない。でも荒川について言及している全員が「わからない、あんなわからないものはない」と言って、何であんなことを言うんだろう、と言いつけているのは面白いではないですか。分からないのになぜこんなに残るのか。そのことを考えると、それはやはりその瞬間を必死で思考しているというか、この講座のテーマからいうと、一番最初に室井さんが言った「迷う」ということを実践しているからです。迷うことが大事であって、迷いの結果残された言葉が大事なわけではありません。

計算するんじゃなくて、迷うということ。迷うという実践を目の前で見せる。たしかに迷うためにはある程度計算もしなきゃいけないし、論理的思考もしなきゃいけないけど、計算や論理的思考に従って、それが破綻する瞬間も見せてしまう。そういうところに哲学のコアの部分があると僕は思っているんですね。その意味で荒川さんは、制度的には美術家とか建築家とか言われるんだけど、僕は哲学者だと思ってます。哲学は専門分野じゃないんです。美術家、アーティスト、科学者、政治家や実業家でも、この人のこの部分は哲学者だなと思うようなことがありますね。

発言者C 座ったまま失礼いたします。興味深いお話ありがとうございます。今日不死ですか、あと永遠というようなところでお話しいただいたんですけども、先生のお考えになる本質的に生きるっていうのはどういう状態と思われるのかお伺いできますでしょうか。

ちょっと漠然として、恐縮ですけども、よろしく願います。

吉岡 本質的に生きる、そうですね。これまでの質疑応答の議論の流れからすると、僕はやはり「今の瞬間に生きる」ことが、本質的な意味で生きることだと思うんですね。

とはいえ人間だから、やっぱり明日どうしようとか、1年後どうしたいとか、この講座来年もやるべきかとか、計画を立てる。もちろんそれはいいんですけども、それと同時に今、この瞬間が一番大事ということがあります。

今この瞬間というのは、別に客観的な時間軸上のある時点という意味ではないのです。僕は過去の人たちを大事にすると言っていますけれども、過去の人たち、例えば200年前の別な国の哲学者というような、そういう時間的な隔たりで見ているわけではなくて、例えばカントやスピノザについて考える時は、本当に彼らが目の前にいるんですよ、現在のこの瞬間に。もちろん、常識的には、そんなのあり得ない。残されたテキストがあつて、それを読んでいただけなんですけれども、本当にその存在が目の前にいるという感覚なのです。過去の人たちと一緒に現在を生きるっていうのが、大事なことなんです。

逆に、今生物学的には生きている同時代人だったとしても、その人の言ってることは別に今この瞬間に関係ないっていうか、自分で迷い考えてるのではなくて、どこかで聞き知ったことをただ反復してるだけというような人は、その限りにおいてはある意味最初から死んでるんです。時計で計れる時間的な現在という意味ではなくて、自分の目の前に現れるリアルな存在、そういう存在とちゃんと向き合うっていうのが、生きるということの本質かなと思うんですよ。

発言者C それは精緻に計算された生命体というところを引用すると、まずそれを超えて没頭するとか、何て言うんでしょうね。01データの生命体を抜け出るといようなイメージもあるんでしょうか。

吉岡 うん。この辺はたぶん室井さんと違うのかもしれないけれど、僕は人間がものを考えたりすることは、この世界の中でものすごく特殊なことだとは思っていないんです。人間の思考は人間を越えた生命プロセスのひとつの側面だと思っています。

だから人間であるかどうかすらあまり関係がない。人間はたまたまロジカルな思考や言語のような抽象能力の仕組みを進化の過程で手に入れたために、今こんなふうに「ああでもないこうでもない」と議論していますけれども、これはただ単に生命活動が人間の神経系や脳のようなフィルターを通して、ある形で現れてきているだけであつて、別になくなっても大元は変わらないんじゃないか。そういう感覚を僕は小さい子供の時からずっと持ってるんですね。それが、さっき言った「子供の時から死そのものものは別に怖いと思わなかった。自分がなくなることを怖いと思わなかった」ということに関わっていると思います。

ある時、僕の知り合いでちっちゃい子供を持っているお母さんから、彼女の子供が小学生になって死ぬのが怖いと言いつつ、吉岡さんは哲学者だから答えてやってくださいと言われた。その時どう応えようかと思つて「何が好き？」つてその子に聞いたら「恐竜が好き」と言うので、「恐竜ってどれぐらい昔に生きていたか知ってる？」と聞いた。「2億3千万年前に生まれて、6,600万年の隕石の衝突で滅びた」と、ちゃんと知っているのです。それで、そういうとんでもない時

間の長さがあつて「その間ずーっと、君も僕も死んでたんだよ」と（笑）。今生きている人間は、数十年から長くて百年くらい現れて、すぐいなくなるだけ。その先も後も宇宙はずーっと続いている。大海原に泡がポコッてできて、パチンと弾けたみたいなのが我々であつて、「生まれる前までずっと死んでたんだから、死ぬのなんてちつとも怖くないよ」つていう話をしたけど、もうひとつ伝わらなかったです（笑）。ちょっと子供向きに無理し過ぎたからか。

発言者D 今日は貴重なお話を本当にありがとうございました。12回目にしてやっとこれでした。東京から来てます。質問です。「生きるっていうのは、現在のリアルに向き合うことだ」という、今日のたくさんのお話の中からそのフレーズが一番ずしつと来ています。

ただ、その中でお手紙の方、上から目線で経済を語っているつておっしゃったけれども、人つて何か拡大自我つていうか、ここにいる人たちの集団の中に今いる私は、その一部である。例えばインターネットとかに、そういう評論的な言葉が山のように溢れている中で、浴びて浴びてしているとそういう言語になってしまうのかとか、出てくる時に思うんですよね。で、そういう毎日を送っていると、今リアルに生きるという向き合う対象をどこにするのかがちよつと分からなくなることがあります。こんなにたくさんの人がたくさんのことを言つて。美術が好きだから、いろんな展覧会に毎週行くんですけど、いろんな人がいろいろな表現してるんだつたら、私はもう何も作らなくてもいいし、何も考えなくても発表しなくてもいいんじゃないかと。そういうふうな気になることもあるんですけども、乗り越え方とかいただけたら。

吉岡 無理に乗り越えなくていいと思います。でも今の感覚は共感するところがあります。僕もどちらかという、人が言ってくれるなら何も言わなくていいやと思いがちなんです。この点も、室井さんとはよく対照的と言われてきたことなんですけれども。室井さんは、まず人の意見を全否定するところから始めます。何か言うとなぜ「違う、違う」という人だったんです。

それに対して僕は、代わりに言ってくれる人がいるんだつたら別に自分はいいや、みたいな感じなんです。自分よりも優れた人はこの世界にたくさんいると思うから、その人たちが代わりに言ってくれたらいい、その方が楽だつていうタイプの人間なので、今のご意見はすごく共感できるんです。それでいいとは思うんだけど、現代は「お前も何か言わなきゃダメだ」というプレッシャーが強いから、そういう落ち着きが持ちにくいね。

それはやっぱり、僕らがみんなメディアに晒されているからなんですよ。インターネットに始まつたことではなくて、テレビ、ラジオからそうなんです。それ以前のジャーナリズムからそうなんですけど、やはりテレビの影響は大きいと思います。僕なんてまさにテレビ世代ですから。今はテレビをまったく観ていないけれども、50歳くらいまでずっと観てきましたからね。毎日テレビを観ていると、完全にテレビの思考パターンで考えていましたね、日常的に。

そのことを分かつた時に、では観なきゃいいのかと思う。でも無理でしょう？ テレビとかネットが存在しないような世界に行つたらどうか。本当に無人島に行つて帰つてこなければ解決するのもかもしれないけれど。そうではなく自分は観ないとしたとしても、テレビやネットによつて動いている世界で生活しているという現実是不変なわけじゃないですか。だから自分が影響を受けなくても、メディアに支配された世界の中で、自分はちよつと変わり者というポジションを与えられるだけであつて、世界それ自体は何にも変わらないじゃないですか。だから自分が何か決断をしてこの状況を乗り越えるというような課題を立てなくてもいいと、僕は思いますね。

室井さんは死ぬまでテレビを見ていましたね。僕はある時期から耐えられなくなってテレビを追放したんですけども。でもその違いはあんまり大したことではないと思います。それは性格の違いであって、室井さんがテレビを観ていたからといって、そのことでも僕と話が通じなくなるとか、そんなことにはならなかったから。そうしたことは個々人で判断したらいいことで、別に「乗り越える」というような目標を立てる必要はないんじゃないかと僕は思います。

安藤 時間になりましたので、最後に吉岡さん、12回ご苦労様でした。

(拍手)

これで終わりにしたいと思います。ぜひ来年度4月からまたお越しください。よろしくお願いいたします。

(拍手)

2024年3月9日(土) 於：京都芸術センター「大広間」